

文字・表記の造語性に関する考察

—認知プロセスと書字方式の観点から—

吉田 敬

1. はじめに

文字論での中心的な研究課題は、「そもそも文字とはどういう言語的機能を持つ言語記号であるか」(河野, 1994, p. 3)である。したがって、「文字の言語的機能は表語にある」(亀井・河野・千野, 1996, p. 1347)とされるように、この分野では、表語を目的とする文字の機能、すなわち、視覚的に語形を示して意味情報などを表出・伝達するという機能の側面に関心が置かれてきたと言える。

一方で、たとえば、従来からしばしば漢字の造語力が注目されてきたように、文字・表記には、そうした表語的な機能のほかに、「造語性」といった非伝達性の機能もあると考えられる。この文字・表記の造語性は、漢字に限ったものではなく、「ヲタク」や「うp」のように、他の文字種⁽¹⁾においても認められる機能と言える。この「ヲタク」がそうであるように、語形の変化を伴わず、文字面の変化だけで新たな語を作り出せる点などは、文字・表記ゆえの特徴とも言えよう。

本稿では、文字・表記に見られるこの造語性の機能がどのような背景からもたらされているのかを考察する。以下では、文字・表記の造語性について、主に認知プロセスと書字方式の観点から述べていく。

2. 文字の性質と造語性との関係

文字の働きは表音と表意に大別されるというように(樺島・続木・関口, 1985, p. 10)、文字には、表音性と表意性の性質がある。なかでも漢字は「表音性と表意性とを兼ね備えた表語文字」(乾, 2014, p. 2008)とも言われている。これらのことから、文字には、表音性と表意性、表語性という性質を認めることができる。そして、明治期に、漢字によって「科学」や「哲学」などの抽象概念語が作り出され、その新規の概念や知識が社会に浸透していった(山田, 2006, pp. 86-87)ことにも、漢字という文字の持つ性質(この場合、特に意味)が貢献していることが窺える。文字・表記が関わる造語の多くは、これらの性質に由来するものと考えられる。

一方、漢字には、「形音義」という3つの要素があるとも言われる(山田, 1976, p. 5)。「形」は、「その漢字を組み立てている点や線のことであり、もとは多く略画的の図形」で、「漢字が「象形文字」だといわれるわけはここにある」という(同上)。

「音」は「その図形のみかた」、「義」は「その図形が表している「意味」」を指す(同上)。「音」と「義」は、文字の表音性や表意性から生じるものと考えられる。

この山田(1976)によれば、「表音文字」にも、「音」と「義」とはそろっているが、「形」というものがない(p. 5)という。同書では、この点が象形文字の漢字と異なるとしている。したがって、本来、「形」は、略画から派生した象形文字に対して用い

られる概念と考えられる。しかし、実際のところ、仮名やアルファベットの字形を利用した造語である「コの字形」（原典にある傍線は省略）や「Tシャツ」（野村，1988，p. 194）などを見てもわかるように、漢字に限らず、他の文字種においても、広い意味での「形」という要素を見出すことができる⁽²⁾。

確かに漢字は、古くからこの形音義を利用して、多くの「当て字」を作り出してきた。笹原（2010，pp. 894-895）によれば、形訳による当て字には「弗：\$（ドル）」や「子子：ぼうふら」、音訳（訓訳）による当て字には「倶楽部：クラブ」、意識による当て字には「扉：ドア」や「煙草：タバコ」などがあるという。また、同書では、これらを複合的に使用したものとして「型録（カタログ）」（この場合、音と意味）が挙げられている（同上，p. 895）。当て字とは、このように、漢字の「本来的、一般的な字音や字訓、字義に従わずに語の表記が行われ」（同上，p. 892）たものと言えるが、先の「コの字形」のように、他の文字種でもその形状などを利用した表記が見られる。そこで本稿では、「当て字」を漢字に限定せず、他の文字種を含めた広義的な意味で用いることとする。したがって、以下では「オタク→ヲタク」のように、既存の表記をもとにしながら、その一部（または全体）を他の字種⁽³⁾に変更した表記も当て字として扱っている。また、後述の樺島（1995）を参考に、ここでは、誤字などの一部も広く当て字として扱う。

3. 造語が生じる背景

中田（1982）にある、「将来、文化がますます高度なものとなり、複雑多様なものとなっていくことは当然であろうが、それに追従して、もしくはそれと同時に、多量の造語が必要となる」（p. 73）という指摘は、情報技術が発展した今日の社会を述べたものであるかのようである。近年では、ネット集団語と呼ばれる「インターネットを仲介して繋がった人々がネット上の掲示板、メール（含メーリングリスト）、チャットなどで交流するうちに発生した集団語⁽⁴⁾」（松田，2006，p. 28）も存在しており、このような集団語は、中田（前掲）のいう、より複雑多様になった現代社会ならではの言語変種とも言えよう。

米川（2009，pp. 630-631）では、表記変更による造語例として、娯楽集団語でよく見られる「ヲタク（「オタク」の変更）」や「綾しい（「怪しい」の当て字）」などが挙げられている。本稿では、このような当て字の類も造語の1つとして捉えて議論を進めていくが、後述するように、こうした集団語では、パソコンなどの電子機器によるコミュニケーションのなかから生まれた、表記に関わる造語も少なくない。表記変更によってもたらされる多種多様な造語は、中田（前掲）が予見していた時代の趨勢の一端を象徴しているのかもしれない。次節では、そうした傾向が反映された文字・表記による造語を見ていく。

4. 文字・表記の造語性

4. 1 認知プロセスに由来する造語性

吉田（2021，p. 162）は、「美ジュアル」は「美しい見た目」といった意味を示し、しばしば「ビジュアル」とともに用いられやすい「美しい」などの語の意味まで一語

で表現する表記」としており、他方、「微ジュアル」は、「婉曲的にネガティブなニュアンスを加えて「ビジュアル系」に満たない様子、あるいは「やや」などの意味で「微」が用いられている」としている。この「美ジュアル」や「微ジュアル」のような漢字交じりの表記語の類や、後掲の「ヲタク」などもまた、文字・表記による造語としての性格を持つものと言える。

中田(1982)によれば、漢字の造語力は、「春風」のような複合語のなかでは、「春」や「風」は「独立した一単語ではなく、単語より次元低い一因子にすぎ」(p. 72) ず、こうした因子が集まって「複雑な概念をもつ一単語を造語することができる」(p. 73) 点にその源泉があるという。先の「美ジュアル」や「微ジュアル」などにも、このように語中で一因子化しつつも、自らの字義によって語の意味に影響を与える漢字の特性が表れている。

この「美ジュアル」や「微ジュアル」などが漢字の意味を加えようとする造語の一種であるのに対して、ネット上で見られる「氏ね(死ね)」(以下、用例のカッコ内は意味)のような誤変換に模した当て字は、意味をぼかしたり、漂白したりする働きがある造語と言える。このような忌詞における当て字は、外見上は誤変換(後述)のようであるが、笹原(2010)が「氏ね(死ね)」などは、「ネット上では使えない語を表記上回避するケース」(p. 898) とするように、意図的に同音(同訓)異字に表記変更(誤変換)することで、意味的なマスキングを施そうとする目的があると考えられる。

いずれにせよ、このような当て字は、もとの語に意味的な加除の操作をすることで作り出されている表記語と言える。このような文字・表記の造語性は、認知プロセスから一定程度の説明が可能である。

山梨(2012, pp. 154-155)は、「マッハ・ムカつく」や「チョー・ムカつく」を例に、ことば遊び的な言語表現の産出過程を示している。同書によれば、まず「非常にムカつく」の「非常に」の部分が変項(X)としてスキーマ化される(「X-ムカつく」)。次にそのスキーマのXに新たな語(「マッハ」)を当てはめて事例化されることで新たな表現(「マッハムカつく」)が作り出されているという。この仕組みは基本的に、「チョームカつく」という表現においても同様としている。

吉田(前掲, pp. 168-169)は、この山梨(2012)の枠組みを、文字・表記の操作(表記変更)による造語の産出過程の図式化に応用している。ここでは、「ビジュアル」を「美ジュアル」や「微ジュアル」と表記した語を例にして、図1のようなスキーマ化と事例化からその基本的なメカニズムを説明している。

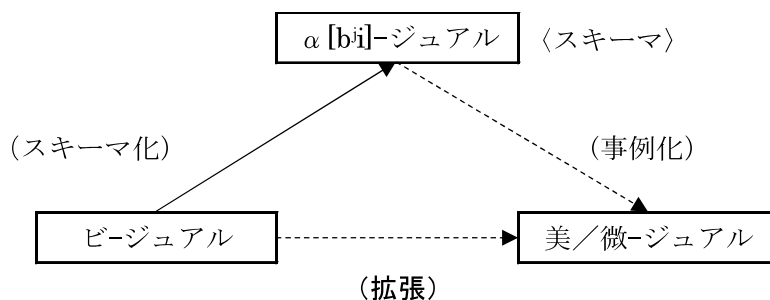


図1 文字・表記の操作による造語の産出過程1

(吉田 (2021, p.169) を一部改変)

αに充当される漢字に要求される音韻は、もとの語形などによって変化するものであり、図1のように、語頭の「ビ」をαとした「ビジュアル」の拡張表現を産出する漢字には、[bi]と同一、または類似した読み(音)を有することが求められる。

このプロセスは、次の「ヲタク」の表記が生じる過程についても一定程度の示唆をもたらすと考えられる。以下で、その過程を見ていくため、まず「ヲタク」という表記が使われるようになった背景を確認しておく。

山中 (2009, p. 16) によれば、「おたく」ということばが「現在にも通じる意味で初めて活字化された」のは、1983年の「漫画「ブリッコ」[中略]に「中森明夫『おたく』の研究」と題されたコラムが掲載された」ことに始まるという。その後、「おたく」は「オタク」というカタカナ表記が併用されるようになる。「カタカナ表記することで、特別な意味を表現しようとしている」(堀江, 2001, p. 19) ケースがあることなどから、「オタク」は、「おたく」からの表記変更によって従来とは異なるニュアンスを表そうとしたものと思われる。また、2典プロジェクト (2005) には、「2ちゃんねるではオタクをヲタクと表記することが多く、○○オタクは○○ヲタという」(p. 569) とあり、「ヲタク」は「オタク」から派生した別表記であることがわかる。

初期の表記が「おたく」とすると、次にそれを表記変更した「オタク」が現れ、最後に「ヲタク」(あるいはその短縮形の「ヲタ」) という表記に至ったと考えられる。そのため、ここでは「おたく」という表記を起点としながら、吉田 (2021) を参考に、「ヲタク」に至る過程を見てみたい。

図2のように、まず「おたく」全体をスキーマ化し、[otaku]という音韻的な同一性や類似性を要求する変項βが形成される。「オタク」は、そのスキーマから事例化された表記と言える。

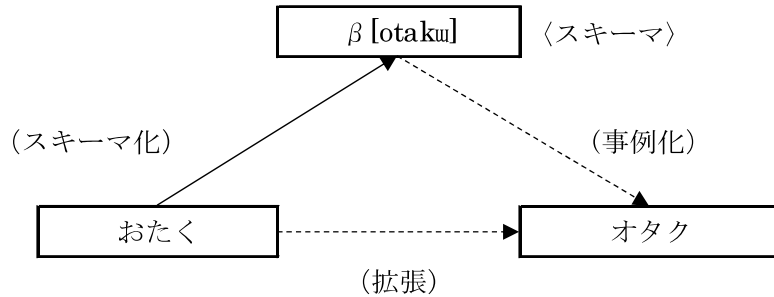


図2 文字・表記の操作による造語の産出過程2

米川 (2009) は、「オタクである人たちは「オタク」を嫌って、近年「ヲタク」「ヲタ」と表記することがある」(p. 607) が、このように表記を変えることで、既存の語に結びついている特定のイメージ (におい) を回避できるとしている (p. 628)。つまり、「オタク」が特定のイメージ (におい) を持つようになると、「オタク」との差別化を図ろうという動機が働くようになり、さらなるスキーマ化と事例化が生じたと思われる。そして、今度は「オタク」から、[o]という音韻的な同一性や類似性を要求する変項 γ を含む「 γ -タク」というスキーマが形成される (図3)。

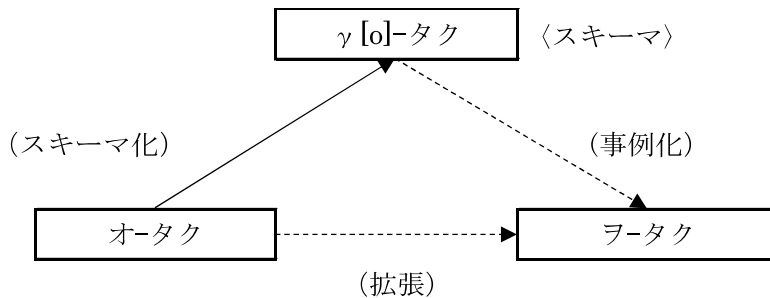


図3 文字・表記の操作による造語の産出過程3

この段階では、従来の語 (「オタク」、または「おたく」) との差別化を図る目的から、音韻的な制約を満たしていても既存の表記 (「おたく」) に戻ることはなく、新たな表記 (「ヲタク」) を作り出している。最初の変化で「おたく」から「オタク」となり、同じ文字種の「をたく」にならなかったのは、同じ文字種内では音韻的に互換性のある字種は限られており、それよりも非外来語に対するカタカナ表記を用いることのほうが社会的にも馴染みがあったためではないかと思われる。また、「おたく」から直接「ヲタク」にならなかったことについては、「おたく→オタク」であれば五十音の対応関係も一致していてより自然な変化であること、また、「オタク」という表記が登場した当初は当然ながら、この表記語に、まだ米川 (前掲) のいう「におい」などはついておらず、より複雑なプロセスを経てまで「ヲタク」にする必要がなかったことなど

が考えられる。このように、文字・表記の造語性は基本的に、それに備わった性質を利用した人の認知活動のなかから生じていると考えられる。

4. 2 書字方式（文字入力仕組み）に由来する造語性

近年では、「ワープロという文具」（高田，2004，p. 35）が登場し、それ以降、日本語の書字方法が大きく変わったことは言うまでもない。それは、認知プロセスを中心としていた文字・表記による造語の在り方にも変化をもたらしている。

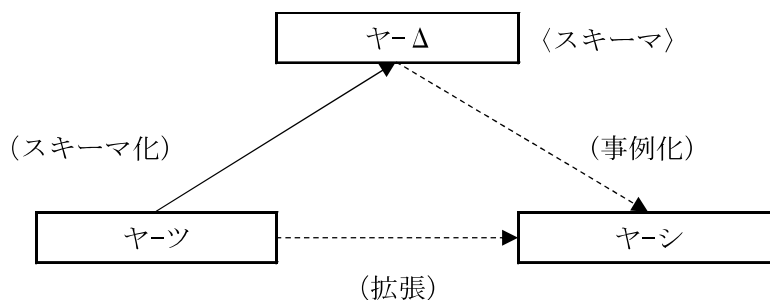
樺島（1995）は、1995年当時すでに、「近頃は、文章はワープロ専用機やワープロソフトを使って書くのが普通になっている」（p. 4）としていたが、一段と技術が進んだ今日では、もっぱらワープロソフトを用いた電子機器による文書作成が主流となっている。近年では、このような文字入力の仕組み、つまり、書字方式の変化に伴う造語も現れている。殊にローマ字入力を主体とする日本語入力⁶⁾の仕組みのなかにおいて、文字（列）の読み方に関わる文字の表音性は、「変換」という、入力した文字（列）の文字種を変更する機能を裏から支える役割も果たしていると言える。

この樺島（1995）によれば、「当て字の中には同音異義語を取り違えた誤りが多く見られる」（p. 206）という。たとえば、ワープロが普及する以前に見られたこの種の当て字の例として、大学生が書いた「専門（専門）」「性（姓）」「紹介（照会）」などを挙げ、これらは「無知による誤り」としている（同上）。

一方で、ワープロソフトなどで文章を書くようになると、「無知による誤り」だけでなく、その文字入力の仕組みによって、「漢字仮名変換の誤りで同音異義語が入ってしまうことがある」（同上，pp. 206-207）ことも想像に難くない。実際、近年では、誤変換などの電子機器を用いた書字方式に由来する当て字の類も確認できる。

ネット集団語のように、文字を介した言語活動のなかで生じた集団語の場合、表記に特徴が表れる場合が多いとされる（松田，2006，pp. 28-31）。たとえば、「漏れ」（「俺」の意）（2典プロジェクト，2005，p. 529）や、「香具師」（「奴」の意）（同上，p. 532）などである⁶⁾。「漏れ」は、「俺も俺も」の誤変換から生じたとされる語であり（同上，p. 529）、一方、「香具師」は、「同人用語の基礎知識」⁷⁾を見ると「似た文字に変えたり誤変換したり…「香具師」とあることから、誤変換が関わっている語であることが窺える。

この「香具師」が生じるまでの過程は少々複雑で、認知プロセスと書字方式とが入り混じることで現れた表記と言える。「香具師」は、「奴→ヤツ→ヤシ→香具師」という過程を辿ったとされる（2典プロジェクト，前掲，p. 532）。「奴→ヤツ」は音を利用した表記変更であるが、「ヤツ→ヤシ」は「ツ」と「シ」の形態的な類似性を利用した認知プロセスから生じたものと考えられ、その意味では、先のスキーマ化と事例化によって一定程度の説明が可能である。まず「ヤツ」からのスキーマ化により、「ツ」と形状的に類似性のある文字（記号・符号）を要求する変項 Δ を有するスキーマ「ヤ- Δ 」が形成され、この条件を満たす「シ」をそこに適用することで事例化（「ヤシ」）されていると考えられる。参考までにこの過程を図4に示した。



※変項Δはもとの文字と形状的な類似性のある文字（記号・符号）を要求する。

図4 文字・表記の操作による造語の産出過程4

ただし、次の段階となる「ヤシ→香具師」は、「ヤツ→ヤシ」とは異なり、「似た文字に変えた」とは認め難いため、「ヤシ」から「香具師」への誤変換から生じた可能性が高いと考えられる。この段階は、認知プロセスではなく、文字入力 of の仕組みなどの書字方式に由来した人為的な誤りから生じていると言える。書字方式に由来するものには、誤変換のほかにも、文字入力の際に、特定の文字（列）を変換しないこと（無変換）から生じた事例などがある。

ワープロなどの電子機器の発達や普及に伴い、「仮名漢字変換辞書も充実されてきているが、かえって同音異義語が多くなって変換に手間がかかることがあ」（樺島、前掲、p. 4）り、変換しないことから生じた当て字を見かけることもある。たとえば、ネット集団語などで用いられている「うp (up)」や「おk (ok)」などの表記は、ワープロソフトなどによる文字入力の際に、変換の手間を惜しんだ「キー入力の省略」（内山、2010、p. 227）、すなわち無変換から生まれた当て字（造語）である。漫画などでは、「一気にヒートうpしてまいりました」（中野・道家、2005、p. 74）や「カウンターでおk？」（ふじた、2015、p. 12）のような使用例が見られる（下線は筆者による）。後者の用例は、漫画のセリフに見られたものであり、口頭での会話をあえて俗的な書き方（「おk」）で示している点に、それぞれ熱中する趣味を持つ会話者（「ヲタク」）たちの属性や趣向を表すうえで合致した表記を用いていることも見て取れる。無論、この種の用例のなかには手間を惜しんだわけではなく、変換をし忘れたことから生じたものもあると思われる。この場合の無変換性の表記は、不意に生じた点で誤変換性のそれと似た性質を持つものである。

仁平（2011、p. 118）は、「期待された目標・基準からの逸脱」の総称を「エラー」とした。同書では、「スリップ」や「し忘れ」は、「行為という文脈での認知的なエラー」の1つであり、特にスリップを広く、「意図した行為が実行されなかったエラー」と定義すれば、し忘れも、スリップに含まれることになる」としている（同上、pp. 118-119）。このような観点から見ると、ある行為のし損ねである無変換や誤変換など、書字方式に由来する一部の表記例は、「し忘れ」を含んだスリップを淵源とする造語と言える。書字方法の違いこそあれ、手書きでは、「書字中に、全く意図しなかった文字を書いてしまう」現象（「書字 slip」（以下、「書字スリップ」））がある（仁平、1984、

p. 278)。この書字スリップもエラーの1つであり⁸⁾、細かく言えば、誤変換や、変換し忘れによる意図しない無変換などは、書字方式に由来する広い意味での書字スリップの一種と考えられる。この種の書字スリップから生じた造語は、認知プロセスを経て意図的に作られたものとは異なり、非意図性の認知的エラーに関わるものと言える。

以上のように、ある集団内で発生・使用されるようになった表記語を見ると、認知プロセスから生じたものだけでなく、書字方式に由来するものもあることがわかる。こうして、文字・表記は、パソコンなどを用いた新たな書字方法の広がりに伴い、それを扱う人の操作に由来する造語性をも発揮することとなった。換言すれば、上で見てきたような人の認知活動や、書字方法の技術的な進歩が、文字に備わる種々の性質を生かした造語性の機能を引き出しているとも言える。

5. おわりに

本稿では、日本語の文字・表記に見られる造語性の機能について概観し、それがどのようなにもたらされているかを検討した。

文字・表記のこのような造語性は通常、文字の持つ表音性や表意性、表語性といった性質や形態的特徴、つまり、形音義からもたらされるものであり、それを利用した人の認知活動から引き出されている機能であることが窺えた。また、文字・表記は近年、誤変換あるいは無変換など、書字方式に由来する造語を作り出すこともある。このような文字・表記の造語性は、認知プロセスのそれとは異なる方向から生じる性格のものであり、この種の造語力は、電子機器が普及に伴う今日の人の言語活動の営みが引き出した産物と言える。

本稿では、文字・表記の造語性をもたらすスキーマ化と事例化の過程を示したが、山梨(2009)は、ことばの拡張表現について、「言葉遊びの観点からみた場合、通常の規範的な言語使用のレベルを越えて、慣用的な表現を想像以上に強引にずらし、拡張することが可能」(p. 196) だとしている。したがって、上で示した図式は、創造的で造語性に富んだ日本語表記の拡張表現に対して、さらなる示唆をもたらす枠組みへと応用・発展できるものと思われる。

また、文字入力の仕組みに由来する誤変換、あるいは無変換による表記例については、非意図的なケースが含まれるため、認知プロセスからの説明では限界があり、むしろこれらは、書字方式に由来した認知的エラーの観点から考察することが有益であった。

一方で、「キー入力ミスや漢字の誤変換は頻繁に起こるものであるがゆえに、期せずして時に面白い語感のものでできることがある」(内山, 2010, p. 235) が、多くの場合、それらの使用は一時的であり、「ほとんどはそのまま忘れ去られてゆく運命にある」(同上) と言える。しかしながら、他方では、「香具師(奴)」のように、誤変換によってもとの意味と表記とが乖離した語が、その意味的な不明瞭さによりコミュニケーションを阻害する恐れがあるにもかかわらず、特定の集団内の語彙体系に組み込まれている。今後は、このように一見しただけでは意味がくみ取れない表記の在り方が造語法の手段の1つとして浸透し、その集団内で受け入れられている背景についても検討を加えていく必要があるだろう。このような語表記が集団内において浸透するの

は、書き手の認知プロセスや認知的エラーから説明できる現象ではないため、その理由を書き手のなかに求めるのではなく、むしろ読み手との関わりのなかからそれを捉えていく姿勢が不可欠となろう。これらについては今後の課題とし、稿を改めることとしたい。

【注】

- (1) しばしば「文字種」と「文字体系」は同じような意味で使われることがある。本稿でいう「文字種」も「文字体系」とほぼ同義であるが、「文字体系」が文字の集合体としての体系的な特徴のほうに焦点が当たっているのに対して、「文字種」は文字の集合体としての種類のほうに焦点が当たった用語として扱っている。
- (2) ただし、「T シャツ」をはじめ、アルファベットを利用した造語のなかには、外国語（英語）由来の外来語も含まれており、厳密には、「コの字形」のように仮名によるものとはいささか事情が異なる点もある。
- (3) 「字種」は通常、「同じ音訓・意味を持ち、語や文章を書き表す際に互換性があるものとして用いられてきた漢字のまとまり」（文化審議会国語分科会漢字小委員会，2015，p. 1）を指す用語であり、常用漢字表の「本表」には、字種 2136 字を掲げ」（文化庁（文化庁国語課），2011，p. 3）ている。このことから字種は、端的に言えば、おおよそ特定の範囲内における字（漢字）の種類とも言えることがわかる。ただし、常用漢字表のように必要に応じて範囲を定める場合はあるものの、本稿では「字種」を、漢字に限定せずにより広く、ある文字種内における字の種類として用いている。また、常用漢字表では、「総字数と字種類は一致するが、これを他の時期に制定されたものと比較するとき、字種と呼ぶ」（志村，1996，pp. 18-19）とされるが、本稿では「字種」の使用に際し、必ずしも各文字種を通時的に比較する場合に限定していない。
- (4) 柴田（1958）によれば、「集団語」とは、仲間意識を有する集団内において極めて人工的に作られることばのことをいう。
- (5) 遠藤（2015，p. 126）によれば、キーボードによる日本語入力の方法の 93.1%を占めるのがローマ字入力だという。
- (6) 本来、香具師は、「興行や物売りを生業としている人のこと」（2 典プロジェクト，2005，p. 532）を指す語である。
- (7) https://www.paradisearmy.com/doujin/pasok_yashi.htm
(2022 年 1 月 31 日閲覧)
- (8) 書字スリップについて仁平（2014，p. 321）は、「書こうと意図していた文字とはちがう文字を書いてしまうエラー」としている。

【引用文献】

- 乾善彦（2014）「文字史」佐藤武義・前田富祺（編）『日本語大事典（下巻）』，pp. 2007-2009，朝倉書店
- 内山弘（2010）「ネットの日本語—2 ちゃんねるとニコニコ動画を中心に—」『地域政策科学研究』7，pp. 219-236，鹿児島大学
- 遠藤諭（2015）「神は雲の中にあられる（第 114 回）」『週刊アスキー（2015 3/17）』1019，p. 126，KADOKAWA

- 樺島忠夫 (1995) 『ワープロ自由自在…のお助け漢字辞典』 KK ベストセラーズ
- 樺島忠夫・続木敏郎・関口泰次 (編) (1985) 『事典日本の文字』 大修館書店
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』 三省堂
- 河野六郎 (1994) 『文字論』 三省堂
- 笹原宏之 (編) (2010) 『当て字・当て読み 漢字表現辞典』 三省堂
- 柴田武 (1958) 「集団語とは」『NHK 国語講座 日本語の常識』 日本放送協会 (編), 宝文館
- 志村和久 (1996) 「字種」佐藤喜代治・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・飛田良文・前田富祺・村上雅孝 (編) 『漢字百科大事典』, pp. 18-19, 明治書院
- 高田時雄 (2004) 「書物と漢字の未来のために」『月刊しにか』 15(3), pp. 34-39, 大修館書店
- 中田祝夫 (1982) 『日本の漢字』 (大野晋・丸谷才一 (編) 『日本語の世界 4』) 中央公論社
- 中野独人 (作)・道家大輔 (画) (2005) 『電車男①—がんばれ毒男!—』 秋田書店
- 2典プロジェクト (2005) 『2典 (第3版)』 宝島社
- 仁平義明 (1984) 「書字 slip の実験的誘導—書字運動プログラムの pre-activation の効果—」『日本心理学会第48回大会発表論文集』 p. 278, 日本心理学会第48回大会準備委員会
- 仁平義明 (2011) 「エラー」子安増生・二宮克美 (編) 『キーワードコレクション 認知心理学』, pp. 118-121, 新曜社
- 仁平義明 (2014) 「両手の同時運動はどのようにコントロールされるか—両手の急速反復書字で生じた両側性スリップの分析—」『白鷗大学教育学部論集』 8(2), pp. 321-332, 白鷗大学教育学部
- 野村雅昭 (1988) 「漢字の造語力」佐藤喜代治 (編) 『漢字講座 第1巻 漢字とは』, pp. 193-217, 明治書院
- ふじた (2015) 『ヲタクに恋は難しい①』 一迅社
- 文化審議会国語分科会漢字小委員会 (2015) 「常用漢字表における「字体・書体・字形」等の考え方について (共通理解のための素案)」
- https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/shoiinkai/iinkai_14/pdf/shiryo_3.pdf
- (2022年1月31日閲覧)
- 文化庁 (文化庁国語課) (2011) 『常用漢字表 (平成22年11月30日内閣告示)』 ぎょうせい
- 堀江紫野 (2001) 「カタカナ表記の研究—非外来語系を中心に—」『国文目白』 40, pp. 16-24, 日本女子大学
- 松田謙次郎 (2006) 「ネット社会と集団語」『日本語学』 25(10), pp. 25-35, 明治書院
- 山田勝美 (1976) 『漢字の語源』 角川書店
- 山田貞雄 (2006) 「問 10 明治期には新しい訳語が多く作られたそうですが、現代も同じように訳語の新造をすすめていくのがいいのでしょうか。(「言葉に関する問答集)」」国立国語研究所 (編) 『外来語と現代社会 (新「ことば」シリーズ19)』, pp. 86-87, 国立国語研究所
- 山中智省 (2009) 「「おたく」誕生—「漫画ブリッコ」の言説力学を中心に—」『横浜国大言語研究』 27, pp. 16-34, 横浜国立大学国語・日本語教育学会
- 山梨正明 (2009) 『認知構文論—文法のゲシュタルト性—』 大修館書店
- 山梨正明 (2012) 『認知意味論研究』 研究社
- 吉田敬 (2021) 「新たな交ぜ書きの諸相—用法の類型化とその産出過程に関する認知意味論的考察—」『立教大学日本語研究』 27, pp. 155-172, 立教大学日本語研究会

米川明彦 (2009) 『集団語の研究 (上巻)』 東京堂出版